



Title	国家から地域へ：ドイツ語教育におけるドイツ事情の変容と異文化理解教育
Author(s)	中川, 亜紀子
Citation	大阪大学言語文化学. 2003, 12, p. 165-177
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77956
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国家から地域へ

ー ドイツ語教育におけるドイツ事情の変容と異文化理解教育 ー*

中川亜紀子**

キーワード：ランドeskunde、国家と地域、異文化理解教育

Im Deutschunterricht nennt man soziale und kulturelle Informationen „Landeskunde“. Landeskunde im Deutschunterricht wurde bisher hauptsächlich mit Informationen über die Gesellschaft oder Kultur der Bundesrepublik Deutschland gleichgesetzt. In den letzten Jahren werden aber auch Informationen über Österreich und die Schweiz behandelt. Dazu kommt auch die Tendenz, dass man die Landeskunde nicht mehr nur nach Ländern sondern auch nach Regionen des deutschsprachigen Raumes betrachten will. Unter diesem Einfluss kann man in meisten neueren DaF-Lehrwerken nicht nur deutsche sondern auch österreichische und schweizerische Informationen finden.

Man benötigt heutzutage noch eine weitere Perspektive. Neben der Integration Europas verändert sich auch die Situation um den deutschsprachigen Raum. Das heißt, durch den Verlust der integrierenden Funktion von bestehenden Nationen kann man nicht mehr die Gesellschaft oder Kultur des deutschsprachigen Raumes begreifen, ohne andere Regionen in Europa zu berücksichtigen. Mit anderen Worten; der zunehmende Austausch zwischen Menschen, die Grenzen zwischen Nationen oder Sprachen überschreiten, führt dazu, dass wir unsere vertrauten Gedanken über Nation und Sprache verändern müssen. Auch Landeskunde sollte eine solche Perspektive haben.

Das Ziel im Fremdsprachenunterricht ist heute nicht mehr nur auf die bloße Vermittlung der Sprache reduziert, sondern auch auf die Befähigung der interkulturellen Kompetenz. Der neue Begriff von der Landeskunde ist dabei von entscheidender Bedeutung. Die Lernenden bemerken die Unterschiede und die Vielfalt im deutschsprachigen Raum und sensibilisieren dadurch ihre Wahrnehmung der Fremdheit oder Verschiedenheit. Damit entwickeln sie neue Fähigkeiten im Umgang mit fremden Kulturen.

* Von Nationen zu Regionen: Die Veränderung der Landeskunde im Deutschunterricht und Interkulturelle Bildung (NAKAGAWA Akiko)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

Zu beachten ist aber der Regionalismus in Europa, der im Gegensatz zu transnationalen oder -regionalen Gedanken eine lokale Identität sucht. Und wir müssen auch die Immigranten berücksichtigen, die aus außereuropäischen Ländern kommen und andere kulturelle Prägungen haben. Sie sind auch Einwohner Europas und in den Begriff der Landeskunde einzuschließen. Wir lernen aber mindestens schon, dass es in einer Nation pluralistische Regionen gibt und zwischen diesen nicht nur Unterschiede sondern auch Gemeinsamkeiten bestehen. Die Veränderung der Landeskunde weist uns einen neuen Weg zum Fremdverstehen.

1. はじめに

ある言語を習得するには、その言語の単語や文法を身に付ける以外の要素が必要である。すなわち、それらに加え、その言語が実際に使われている社会の背景知識についても通じていなければ、実際の言語使用に際して困難が生じると思われる。それでは、その背景知識とはいったいどのようなものであるのだろうか。ドイツ語教育では、それらの背景知識は総括して「ランデスクンデ」(Landeskunde)と呼ばれている。

ランデスクンデとは、異言語の教授あるいは学習の際に、その言語と共に教えられる／学ばれる当該社会・文化に関する情報のことである。そうした情報として、ドイツ語教育ではこれまで、ドイツの文化が主に取り上げられてきた。つまり、ドイツ語の背景知識とは、ドイツ社会の情報であり文化であるとされてきた。しかし、周知のように、ドイツ語はドイツだけでなくオーストリアやスイスの一部でも国語・公用語として、あるいは人々の日常言語として話されている。したがって、ドイツ語の教育においてドイツの情報だけが取り上げられるのは偏りがあるのではないか、あるいは現実を反映していないのではないかという疑問が DaF¹⁾内部において生じた。そして、ドイツ、オーストリアやスイスの研究者が集まり討議した結果、ドイツ語教育におけるランデスクンデにドイツだけでなくオーストリアやスイスの情報も取り入れようという共通認識が生まれた。この認識は、現在 D-A-CH コンセプトと呼ばれている。このコンセプトに従い、現在制作される DaF の教材には、ドイツだけでなくスイスやオーストリアの情報も記述されていることがほとんどである。

また、この D-A-CH コンセプトは近年さらなる拡がりをみせている。それは、ドイツやスイス、オーストリアといった国家の単位からではなく、むしろそれら国家の内部に

¹⁾DaF(Deutsch als Fremdsprache)とは、非母語話者に対するドイツ語教育を専門に取り扱う学問領域である。これまでに専門誌が多数発刊され、大学の講座としてもドイツ語圏の複数の大学に設置されている。また、この学問領域からのドイツ語教材の出版も盛んである。

存在するそれぞれの地域からランデスクンデを捉えようとする傾向である。さらに、ヨーロッパの統合が進展する中で、これらドイツ語圏をドイツ語を話す地域の集合体として、すなわち国ではなくひとつのまとまりとして、ヨーロッパという広い枠組みのなかで捉える視点も生まれつつある。

本稿では、まずランデスクンデに対する捉え方が変容してきたこれまでの経緯を辿り、それが現在どのような観点をもっているのかを確認したい。次に、ヨーロッパの統合が進展する中で、ランデスクンデの概念にこれからどのような観点が含まれていく必要があるのか、ドイツ語圏をヨーロッパあるいは EU との関連で眺めることによって探りたい。最後に、そのようにして新たに捉え直されたランデスクンデの概念が、現在の異言語教育の目標に対して、どのように役立ちうるのかについて考察したい。

2. ドイツ事情（ランデスクンデ）の変容

2.1 ドイツ語圏すべての情報へ

非母語話者向けのドイツ語教育を専門に取り扱う学問領域である DaF においては、長い間、ランデスクンデはドイツの事情あるいはドイツの文化と同等視されていた。また、実際、DaF の教材にもその傾向は強くみられ、教材にオーストリアやスイスのことが描かれるのは稀であったといえる。それには、ドイツという国が、オーストリアやスイスと比べた場合、その国土面積・人口においてもっとも規模が大きいということだけでなく、過去も現在も世界政治・経済において大きな影響力をもっているということが影響を及ぼしているだろう。たとえば日本におけるドイツ語教育においても、日本とドイツとの歴史的な関係もあり、ドイツ語の授業で話題にのぼるのは、これまでほとんどの場合ドイツの社会事情であり文化的事項であった。しかし、DaF においては近年、その状況に変化がみられる。その変化の最初のきっかけは、1990 年に発表されたいわゆる ABCD テーゼ（ABCD-Thesen）²⁾である。

これが発表される少し前の 1988 年に、当時の東西両ドイツ・オーストリア・スイスのドイツ語教育の専門家が一同に会したが、ABCD テーゼはそこにおける議論から生まれたものである³⁾。ABCD テーゼは全部で 22 のテーゼから成るが、その内容はそもそも、ドイツ語の教師にどのようにランデスクンデの教育をおこなうか、あるいは参加国がどのように協力体制を築くか、ということに向けられたものであった。しかしまた同時に、教材におけるランデスクンデの在り方についても示唆を与えるものであった。ここにお

²⁾ ABCD-Thesen(1990)

³⁾ この 4 カ国の代表が集まり話し合った内容が、後に ABCD テーゼとしてまとめられ DaF の各専門誌に掲載された。A はオーストリアを、B は西ドイツを、C はスイスを、D は東ドイツを表している。

いて初めて、ドイツ語教育内部において、ランデスクンデにドイツ語圏すべての情報を取り入れようという基本的了解が生まれることになる。

たとえば、ABCD テーゼのテーゼ 5 では、「ドイツ語教育では、したがってまた教材ではドイツ語圏すべての情報が考慮されなければならない」と述べられている。また、テーゼ 21 でも、「教員の養成や研修にとって必要とされるべきことは、ドイツ語圏のすべての地域に向けられたランデスクンデのテーマである」と、ドイツ語教育で取り扱われるべき情報は、ドイツだけでなく、ドイツ語が話されている他の諸地域も含むことが確認されている。そして、テーゼ 21 では、ドイツ語圏各国の専門家が協力して、このような研修の計画・実施に取り組むべきことが述べられている。

もっとも、ABCD テーゼ以前にも、量的に不十分ながらもオーストリアやスイスの情報が取り上げられることはあった。しかし、その情報とは、いわゆるステレオタイプのな情報であったといえる。たとえば、オーストリアに関するものであればモーツァルトやシュトラウス⁴⁾、スイスに関するものであればチョコレート、チーズ、マッターホルンなどである⁵⁾。そのような状況に半ば苛立つ形で、オーストリアやスイスに関するランデスクンデにも、ドイツ同様に単なるステレオタイプにとどまらない情報を含めるべきだとする考えが出てきたことは、ある意味当然といえるだろう。

この ABCD テーゼはその後、東西ドイツ統合という歴史的事件を受け、D-A-CH、あるいは稀に D-A-CH-L と呼ばれる新しいコンセプトに受け継がれていく⁶⁾。東西両ドイツの統合は、ドイツに関するランデスクンデだけでなくオーストリアやスイスに関するランデスクンデを見直すきっかけとなったともいえる⁷⁾。なお、D-A-CH コンセプトでは、ドイツ語圏すべての地域を扱うという ABCD テーゼでの基本姿勢が引き続きみられるが、次にみるように、そこからさらに展開した内容もみとることができる。

2.2 国家から地域へ

ABCD テーゼにおける理念を引き継いだ D-A-CH コンセプトであったが、そこには、ABCD テーゼではまだ具体的には展開されていなかった方針がみられる。ABCD テーゼではひとまず、ドイツだけでなくドイツ語圏すべてのランデスクンデ、すなわち、オーストリアやスイスのランデスクンデをドイツ語教育に取り入れることが目下の関心事であったといえる。それに対し、D-A-CH コンセプトでは、それぞれの国家内部に存在す

⁴⁾Krumm(1998 : 532)

⁵⁾Frischherz(2001 : 1243)

⁶⁾D-A-CH あるいは D-A-CH-L は、ドイツ(D)、オーストリア(A)、スイス(CH)、リヒテンシュタイン(L)の各国籍符号を組み合わせたものである。

⁷⁾Frischherz et al.(2001 : 1243)

る個々の地域をみる視点、すなわち「ドイツ語圏における諸地域の細分化されたランデスクンデ」⁸⁾が問題とされている。もっとも、ABCD テーゼにおいても、冒頭の序言ですでに、国家(Nation)的な現象だけでなく、地域的な現象やそれらの境界を越えるような現象をもランデスクンデにおいて取り扱うことが宣言されている。しかし、その具体的な内容は、D-A-CH コンセプトにおいて初めて述べられているといえる。

そもそも、この3つの国では、教育や行政の面で、国家レベルの政府(連邦政府)よりも各州の政府にかなりの権限が与えられているが、政治的にだけでなく社会的・文化的にもそれぞれの地域の独自性が強いといえる。特にスイスにはその傾向が強い。この国は、ドイツやオーストリアとは異なり複数の言語圏から成る国家であるが、ある言語圏とその他の言語圏とでは、言語だけでなく文化も異なるといわれている⁹⁾。また、26ある州(カントン)によっても、それぞれの地域的特性は大きいといわれている。したがって、「スイス文化」、すなわち国家レベルでのスイスの統一的な文化は存在しないうえに、国土の約6割を占めるドイツ語圏全体の統一的な文化も存在しないといえる。ドイツやオーストリアは、スイスとは異なりドイツ語圏地域のみで存立してはいるが、これらの国家においても、地域によって文化は多様であるといえるだろう。D-A-CH コンセプトでも、ドイツ語圏各国の内部にみられる多様性は、それらの国が成る連邦制と歴史的要因に起因するものと述べられている¹⁰⁾。

そもそも、国民国家における文化は、近代における国民国家形成の過程において生み出されたものであり、国民文化としての文化とは、一枚岩的なものではなく内部にさまざまな変種をはらんだものであるといえる。したがって、そのことが各方面で指摘されている今、ランデスクンデが、統一的なドイツ文化やオーストリア文化、スイス文化を提示するのではなく、国家内部の差異や多様性をみることに取り組むことは必然といえるだろう。また、その場合、ドイツ語圏内部での国境ももはやさほど重要ではない。というのも、国家内部の多様性を生み出すここでの「地域」という概念は、必ずしもそれぞれの国家を構成する州の境界と重なるものではなく、州の境界を越えることもありうるからである¹¹⁾。また、D-A-CH コンセプトでは、単に一国内の多様性をみるだけでなく、それら国家間の境界を越える統一性や多様性についても考慮すべきことが述べられている¹²⁾。たとえば、ドイツとオーストリアの国境をまたいで共通する文化もありえ

⁸⁾Hackl et al.(1997)

⁹⁾スイスの国語は、ドイツ語、フランス語、イタリア語、レトロマンシュ語の4言語であり、そのうち前者3言語が公用語とされている。

¹⁰⁾Hackl et al.(1997: 20)

¹¹⁾Hackl(1997)

¹²⁾Hackl et al.(1997: 20)

ば、オーストリアとスイスで共通する文化もありえるということである。すなわち、ここでの「地域」の境界とは、国家内の政治上の単位（州）や国の境界と重なるものではないといえる。

それでは、以上みてきたような、ABCD テーゼおよび D-A-CH コンセプトが提示するランデスクンデの概念は、実際の教材にどのように反映されているのだろうか。次節では、教材におけるランデスクンデが近年どのように変わってきたのかみていきたい。

2.3 教材におけるドイツ事情（ランデスクンデ）の変容

ドイツ語教育におけるドイツ事情、すなわちランデスクンデにおいて、ドイツだけではなくオーストリアやスイスの情報も取り入れようという ABCD テーゼおよび D-A-CH コンセプトの考えを受け、教材にもオーストリアやスイスの情報を描く試みが近年なされている。現在出版される DaF のドイツ語教材には、ドイツだけでなくオーストリアやスイスの情報も描かれていることがほとんどであるといえる。そこでは、ドイツで話されているドイツ語だけでなく、オーストリアやスイスのドイツ語も意図的に取り入れられ、あるいは後者二つの文化的事項も盛り込まれている¹³⁾。教材の評価基準においても、「地域的多様性」という箇所が設けられ、「ドイツと並んで、他のドイツ語圏諸国について論じられているか」というチェック項目が載せられている¹⁴⁾。さらに、ドイツ語圏を国家単位ではなく地域単位でみようとする D-A-CH コンセプトの方針は、近年出版された教材にも反映されている¹⁵⁾。それは、上の評価基準においては、「ドイツ語圏内部の地域的差異についても指摘されているか」という評価項目にみとることができる¹⁶⁾。

しかし、このように ABCD テーゼや D-A-CH コンセプトの要素を取り込み、一見したところ改良されたかにみえる教材であるが、依然として問題点もみられる。まず、ドイツ語教育においてドイツ語圏すべての情報を扱うことが ABCD テーゼにおいて初めて明確に確認されてからかなりの年数が経過したが、現在でもなお教材にはドイツの情報が中心であり、オーストリアやスイスに関してはステレオタイプ的な情報しか載せられていないといえる¹⁷⁾。また、オーストリアやスイスの情報が、不十分あるいは不正確であることも問題として指摘されている¹⁸⁾。このように、教材におけるオーストリアやスイ

¹³⁾たとえば、Memo(1995)、Stufen(1995/1997)、Moment mal!(1996/1998)といった教材。

¹⁴⁾Meijer(1998: 25)

¹⁵⁾たとえば DaF in zwei Bänden(1999)では、ドイツの各州が各課のテーマとなっている。ただし、オーストリアとスイスに関しては、それぞれ一章ずつ割かれているだけであり、地域ごとの詳細な記述はここではドイツに関してのみ実現しているといえる。

¹⁶⁾Meijer et al.(1998: 25)

¹⁷⁾Hackl(1997: 236)

¹⁸⁾Krumm(1998: 531)によると、ある教材において、ドイツに関してはその州と州都が挙げられているのに対し、オーストリアに関してはそれぞれの都市が手当たりしだいに挙げられ、その結果オーストリアには

スの情報に関しては、まだまだ不十分な面がみられる。その原因としては、それらの地域に関する知識や調査が不足していること、あるいは、それぞれの地域ごとに詳しくみていくには多くの時間を必要とするが、授業という限られた時間においてはそれが困難であるということが考えられる¹⁹⁾。今後、教材の著者や出版社のさらなる努力によって、より正確な情報が工夫を凝らした形で教材に取り入れられることが期待される。

以上、ドイツ語教育におけるドイツ事情に、ドイツだけではなくオーストリアやスイスの地域情報が含まれるようになるまでの経緯をみてきたが、そのような個々の地域をみるミクロな視点と平行して、現代においてはマクロな視点が求められている。それは、ドイツ語圏を、ヨーロッパあるいは EU という広い枠組みの中で捉えようとする観点である。そもそも、これまでに述べてきたような国民国家の文化ではなく地域の文化を詳細にみようとする姿勢が登場した背景には、ヨーロッパが近年置かれている状況が密接に関係しているように思われる。ヨーロッパの統合が推し進められる中で、ドイツ事情としてのランデスクンデはどのように変わっていくのか、あるいはどのような意味範疇を今後もつ必要があるのか。次章では、ヨーロッパあるいは EU におけるドイツ語圏という観点から、ランデスクンデについて考えてみたい。

3. ヨーロッパ統合とドイツ語圏

ドイツやオーストリア、あるいはスイスの政治や社会は、いまやそれぞれの国家内部だけをみて、あるいはこの3国だけをみて捉えきれるものではないことは確かだろう。つまり、ヨーロッパ統合が進む現代ヨーロッパにおいては、これらの地域を、ヨーロッパあるいは EU という国家を超えた大きな枠組みで捉えることが必要といえる。というのも、政治的・社会的な影響力を失った国家を単位にしてランデスクンデを考えることは、現状にそぐわないばかりか、もはや意味を成さないものになりつつあるといえるからである。すなわち、先にみたような国家内部の地域単位でランデスクンデを考えると、ローカルな視点が必要とされる一方で、国家を超えるヨーロッパという大きな枠組みからランデスクンデを捉えようとするグローバルな視点が必要とされている。

DaF においても、そのような視点が生まれつつある。すなわち、ドイツ、オーストリア、スイスをドイツ語という共通点で結ばれたひとつの集まりと考え、それらをヨーロ

あかたも州や州都がないような印象を与えかねないという。また、別の教材では、ドイツ語圏内のドイツ語の変種として、スイスドイツ語特有の単語が載せられているが、ドイツとオーストリアのドイツ語として同じ単語が載せられている。しかし実際には、ドイツでは耳にしないオーストリアのドイツ語というものがあるのだから、これは事実と反するものといえよう。

¹⁹⁾ Meijer et al.(1998: 21)

ツパという文脈の中に置く考え方である²⁰⁾。また、ドイツ語圏をヨーロッパとの関連で考えるこのような視点は、今後予想される EU の東方拡大においても、重要な意味をもつものと思われる。なぜなら、EU が東欧諸国にまで拡大されれば、ドイツやオーストリア、スイスは地理的にみてまさに EU の中心となる²¹⁾。そして、それら東欧諸国との関係において、ドイツ語はたとえば商業言語として需要が増すことが予想されるからである。また、EU が政治や経済あるいはその他のあらゆる場面で国家間の境界を越えていくなれば、これらのドイツ語圏地域と他のヨーロッパ諸国とを区分できるのは、政治でも社会でもなく、そこで話されているドイツ語という共通点になるともいえる。

しかし、また、ドイツ語圏というひとつの言語圏を超える視点も必要と思われる。ヨーロッパでは、EU という共同体が政治、経済、その他の分野において大きな影響力を持つ一方で、既存の国家がもつ統合機能は衰退しつつある。その一例として、国境を越える際に、以前に比べて手続きが簡略化されつつあることが挙げられる。そのような状況において、たとえばソクラテス計画における各国間の留学促進プログラムを利用した若者の交流など、国境や言語にとらわれない人的交流の機会は増大しつつある。その結果、近い将来、人々がもはや国家や言語にこだわらず、EU 市民としてのあるいはヨーロッパ市民としての意識を徐々に高めていく可能性が考えられる。

ランデスクンデの内容にも、こうしたヨーロッパの状況を取り込む必要があるだろう。国家内部の各地域からランデスクンデを描く試みについてはすでに述べたが、現在ではそれと平行して、国家間の既存の境界を横断する EU という契機により、EU の一員としてあるいはヨーロッパ内の一地域として、ドイツ語圏のランデスクンデを捉える必要があるといえる。すなわち、そこでは、ドイツ語圏だけにとどまらない、他の言語圏と共通するような文化的事項もみうけられるかもしれない。つまり、言語の境界あるいは文化の境界は、政治的な境界としての国境と重なるものではなく、常に流動的なものと考えられなければならないといえる。

それでは、これまでにみてきたようなランデスクンデの概念の変化は、実際の異言語教育においてはどのような意味をもつのだろうか。次章では、ランデスクンデの概念が、現代の異言語教育の目標に対してどのように役立ちうるのかについて考えてみたい。

4. ドイツ事情（ランデスクンデ）の変容と異文化理解教育

かつての異言語教育における目標は、その言語を用いて円滑なコミュニケーションが

²⁰⁾ Krumm(1998)

²¹⁾ スイスは現在のところ EU には加盟していないが、この国はヨーロッパにおける交通の要所であり、また経済的に EU と密接な関係にあることから、加盟国ではないが EU において重要な位置を占めているといえる。

できるように、文法などの言語に関する知識を学習者に伝えることであった。また、ランデスクンデに関しても、当該言語圏に関する網羅的な知識を学習者が得ることが目標とされていた。しかし、従来のそのような目標だけにとどまらず、異言語教育の第一の目標として近年挙げられるのは、異文化と接する能力を高めることである。すなわち、自らと異なるものに対して敏感になり、それを拒絶するのではなく理解する力の養成、つまり異文化・他者と接する能力を高めることである。それでは、これまでにみてきたランデスクンデに関する新しい考え方は、このような異文化理解能力の養成を目指す実際の異言語教育の場では、どのように生かされうのだろうか。

D-A-CH コンセプトが提案するランデスクンデの内容は、ドイツ語圏を個々の地域からみること、さらにそれらの地域間でなにが共通してなにが異なるのかをみることであったといえる。しかし、それによって目指されるのは、学習者がそれら個々の地域に関する完全な知識を得ることではない。重要なのはなによりも、ドイツ語圏の国家の内部や地域の間には存在する差異や多様性、あるいは共通性に学習者が気づくことである。学習者には、そのことにより差異や多様性に対する敏感さを養い、異文化と接する能力を身につけることが期待される。さらには、このようにして当該言語圏の内部には存在する差異について考えることによって、学習者はまた、自らの属する国や言語圏における多様性について考える機会も与えられることになる²²⁾。たとえば、日本人学習者の場合、日本という国あるいは日本語を考えてみれば、ドイツ語圏同様に日本にもさまざまな地域的特性があること、および日本語にもさまざまな変種があることに彼らは容易に気づくだろう。このように、他者だけでなく自らについても考察を深めること、そしてそこから異文化理解および相互理解の道を探ること、これが D-A-CH コンセプトの目指すところであるといえる。

また、そのような場合、たとえば「境界」という概念も変容を迫られる。かつてのランデスクンデにおける「境界」とは、地理的な境界であるか、あるいは国と国との境界であるか、あるいは文化の境界とみなされていたといえる²³⁾。しかし、D-A-CH コンセプト以降のランデスクンデにおいては、境界に対する考え方も変わる。D-A-CH コンセプトでは、ドイツ語圏内部には存在する多様性をみることで、ランデスクンデの概念を捉え直す試みがみられた。そこでは、一国の内部においても地域ごとに差異があること、また地域の境界線は国や州の境界線とは必ずしも重ならないことが確認された。すなわち、このような意味での境界は、従来の地理的な境界や国家の境界、あるいは文化の境界のようにもはや固定されたものではなく、フレキシブルなものと考えられる。また、

²²⁾ Krumm(1998 : 532)

²³⁾ Hackl(1997 : 238)

そのような可動的な境界の概念においては、境界とは、教師や教材によってあらかじめ定められ学習者に与えられるものではなく、各々の生徒がそのつど見つけ出すものとされる。つまり、そこでは、学習者一人一人のもつ境界に対するイメージが大切にされる授業形態が望まれる²⁴⁾。

そのような授業において、文化の差異や共通点を発見するうえで役立つ D-A-CH コンセプトが考えるのは、学習者が最初にもっている偏見やステレオタイプである。それらは、教材が一方的に提示するステレオタイプとは異なり、学習者が自分自身について洞察することを可能にする。そのため、授業においてもそれらは積極的に利用されなければならないとされている。また、そのような授業においては、教師に求められる資質も変わる。これまでの異言語教育の場では、教師には当該の言語圏についてなんでも知っていること、すなわち百科事典的な知識をもっていることが期待されていたといえる。しかし、上で述べたように、学習者の自主性が尊重される異言語教育においては、教師に求められるのはそのような広範な知識よりもむしろ、学習者の自発的な活動を促す授業の調整役としての能力といえる。

5. おわりに

ABCD テーゼの理念を受け継いだ D-A-CH コンセプトに基づくランデスクンデにおいて、一国家内部の差異や多様性への視点が開かれた。さらに、国家や地域間の境界を越える観点も見い出された。つまり、国家や言語にもはやとらわれない現代ヨーロッパの状況を反映する形で、ランデスクンデもかつての静態的な概念から動態的な概念へと変わりつつあるといえるだろう。しかし、次にみるように、D-A-CH コンセプトにおいてはまだ具体的に展開されていない問題点も残されている。

これまでに述べてきたような国境を超えた思考が展開される状況が期待される一方で、それとは逆の動きがあることも指摘しておかなければならない。すなわち、ヨーロッパ統合という動きのなかで、これまで国民国家のもとで抑圧されていた地域、たとえばアルザスやバスク、ブルターニュのような地域では、その地域に固有の言語や文化の復権を目指す動きがみられる。たしかに、ドイツやスイス、オーストリアにおける地域は、それらの地域にみられるような民族のアイデンティティを求める地域とは異なる。しかし、ヨーロッパ統合が進み既存の国民国家の存在が脆弱になり、それに対して地域主義が台頭するという現代のヨーロッパの状況は、ドイツ語圏内の地域にも関係するものであるだろう。どちらの場合にも、国家主権の相対的縮小を機に、EU という大きな枠組

²⁴⁾このような境界概念に基づく具体的な授業の提言に関しては、Hackl et al.(1997)あるいは Hackl(1997)に詳しく記述されている。

がある一方で、それぞれの地域が注目を浴びる状況がみられる。つまり、現在のヨーロッパでは、その内部にある小さな単位としての個々の地域の存在感が増している状況にあるといえる。

また、このような地域主義と並んで、それぞれの言語圏を超えたヨーロッパ人としての意識は、人々の間に実際にはそれほど広まっていないことも指摘されている。たとえば、ドイツとフランスの境界に位置するアルザス地域では、我々が想像するほどの国境を越えた交流が住民のあいだに生まれているとは必ずしもいえないという²⁵⁾。また、スイス内においても、各言語圏の境界線は、以前からほとんど変化していない²⁶⁾。さらに、スイスのドイツ語圏に関しても、そもそもスイスで話されているドイツ語はドイツで話されているドイツ語とは大きく異なることもあり、ドイツのいわゆる標準ドイツ語に対してスイスドイツ語を好んで使用する傾向が若者のあいだでみられる²⁷⁾。このように、言語圏間の境界が強固であるうえに、一言語圏内部においても、複雑な言語事情があるといえる。このことから、ヨーロッパ統合は、経済面ではともかくも、文化的な面や人々の意識・生活レベルではいまなお達成されてないといえるだろう。

さらに、現在のヨーロッパを考えると、忘れてならないのは、非ヨーロッパ諸国からの移民の存在である。他のヨーロッパ諸国同様、ドイツ語圏においても、移民の存在と彼らをめぐる状況は大きな社会的問題となっている²⁸⁾。そうしたヨーロッパにおける非ヨーロッパ系の住民を、ランデスクンデは今後どのように取り上げていくべきなのだろうか。たしかに、これまでに出版された教材にもすでに、彼らを登場させるという事例はみうけられる。しかし、その場合、ただ教材に彼らを登場させたり、彼らのエキゾチックな側面を強調したり、そのようなことだけで満足してはいけないだろう。そうしたやり方は、オーストリアやスイスの情報を取り入れたときのように、単に表面的な情報を取り入れただけにすぎない。また、ヨーロッパにおける異物の存在として、つまりヨーロッパには属さない存在として、彼らが扱われているともいえる。しかし、彼らは異質な存在なのではなく、彼らもまた現在のドイツ語圏あるいはヨーロッパを語るうえで欠かせない存在であるということ、彼らも含めたうえでそれぞれの地域も構成されていること、そのことを念頭に置いた上で今後ランデスクンデを考察しなければならない

²⁵⁾ 中力(2002: 121)

²⁶⁾ 八幡(2000: 284)

²⁷⁾ 八幡(2000: 289)によると、スイスドイツ語圏のテレビ・ラジオのプログラムにおいて、スイスドイツ語の使用場面が増加する傾向がみられ、これまで標準ドイツ語を使用することが決まりであった大学の演習においても、若者がスイスドイツ語でディスカッションを始める場面がみられるという。

²⁸⁾ ドイツ語圏各国の総人口における外国人人口の割合は、1999年時点において、ドイツが約8.9%(7,344,000)、オーストリアが約9.2%(748,000)、スイスが約19.2%(1,369,000)となっている。カッコ内の数値は同年の外国人人口数。データの出处: OECD *Trends in International Migration*(2001)

と思われる。

最後に、以上のような考えを踏まえるならば、「異文化理解」ということばで我々がイメージしてきたものにも、変更を加えなければならない。これまで、異文化理解といった場合、暗黙のうちにも、ある国家と国家、そしてその国家の文化間を橋渡しするものが前提とされてきたのではないだろうか。しかし、D-A-CH コンセプトが我々に気づかせてくれたのは、ひとつの国家内部にも複数の地域があり、それらの地域は異なった文化的特性をもっているということであった。また、それぞれの地域は他との差異のみで存在しているのではなく、我々自身が属する地域も含めて、地域間には共通点もありうるということであった。そのことに気づいた今、異文化理解とは、異なる文化が互いに独立して存在する中で、単にその境界を越えた理解を達成するというのではない。そうではなく、複数存在する文化は差異や多様性を示すこともあるが、同時にまたそれらの間に共通点も存在すること、そのような前提に基づき異文化と接することが異文化理解の最初の第一歩であることになる。D-A-CH コンセプトによるランデスクンデすなわちドイツ事情の変容は、我々に、新たな異文化理解への道を切り拓いてくれたといえるだろう。

主要参考文献

- ABCD-Thesen zur Rolle der Landeskunde im Deutschunterricht. (1990) In: *Fremdsprache Deutsch* 3, 60-61.
- Dienst, Leonore et al. (1999) *DaF in zwei Bänden* 1,2. Ismaning: Max Hueber.
- Fischer, Roland(2001) Landeskunde aus österreichischer Sicht. In: Helbig, Gerhard et al. (Hg.) *Deutsch als Fremdsprache. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung*. Berlin: Walter du Gruyter. 1234-1241.
- Frischherz, Bruno et al.(2001) Landeskunde aus schweizerischer Sicht. In: Helbig, Gerhard et al. (Hg.) *Deutsch als Fremdsprache. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung*. Berlin: Walter du Gruyter. 1241-1252.
- Hackl, Wolfgang et al.(1997) Integrierende Landeskunde - ein (gar nicht so) neuer Begriff. D-A-CH-Konzept. In: *Theorie und Praxis. Österreichische Beiträge zu Deutsch als Fremdsprache* Serie A/Jahrbuch 1, 17-34.
- Hackl, Wolfgang(1997) Von ABCD zu DACH. Grundlagen und Beispiele einer differenzierten Landeskunde der deutschsprachigen Länder. In: *Materialien Deutsch als Fremdsprache* 46, 233-244.
- Häublein, Gernot et al.(1995) *Memo*. Berlin ; München: Langenscheidt.

- Krumm, Hans-Jürgen(1998) Landeskunde Deutschland, D-A-CH oder Europa? Über den Umgang mit Verschiedenheit im DaF-Unterricht. In: *Info DaF* 25, 523-544.
- Meijer, Dick et al.(1998) Landeskundliche Inhalte Die Qual der Wahl? In: *Fremdsprache Deutsch* 18, 18-25.
- Müller, Martin et al. (1996/1998) *Moment mal!* 1,2,3. Berlin u.a.: Langenscheidt.
- OECD (2001) *Trends in International Migration 2001 Edition*. Paris: Sopemi.
- Vorderwülbecke, Anne et al. (1995/1997) *Stufen international*. Stuttgart: Klett.
- 中力えり (2002) 「トランスナショナル空間の成立と文化の分節化」, 梶田孝道・小倉充夫編『国際社会3 国民国家はどう変わるか』, 東京大学出版会, 111-132.
- 八幡康貞 (2000) 「多文化国家スイス」, 木村直司編『EUとドイツ語圏諸国』, 南窓社, 272-298.